

〈研究レポート〉

## 古今和歌集の巻頭歌

——去年とや言はむ今年とや言はむ——

上野 英 二

### 一

『古今和歌集』は、四季の歌、春歌の部から始まる。その巻頭、第一首。

ふる年に春立ちける日、詠める

在原元方

年の内に春は来にけりひと、せを去年とや言はむ今年とや言はむ

新年と立春は一致してしかるべきだが、暦の関係でそれはまま前後することがあり、元日を待たずに立春となることがあつた（年内立春）。この歌は、それを素材に詠まれたものであつた。まだ年も明けないうちに春が来た。さて、この一年を、もう「立春」となったのだから「去年」と言うべきなのか、いやいやまだ「年内」なのだから「今年」と言うべきなのか。

春の訪れを、いかにも『古今集』らしく詠んだ歌だが、しかしこの歌も『古今集』自体も、その評判は必ずしも芳しくない。

貫之は下手な歌よみにて『古今集』はくだらぬ集に有之

候。(中略)先づ『古今集』といふ書を取りて第一枚を

開くと直ちに「去年とやいはん今年とやいはん」といふ

歌が出て来る、実に呆れ返つた無趣味の歌に有之候。日

本人と外国人との合の子を日本人とや申さん外国人とや

申さんとしやれたると同じ事にて、しやれにもならぬつ

まらぬ歌に候。

(正岡子規「再び歌よみに与ふる書」)

ほとんどこれによって、さしもの『古今集』の命脈も止め  
を刺されたかに見えたほどの激越の言だが、はたしてそうい  
うものであろうか。

「年の内に春は来にけり」。歌はまず、春の訪れを歌う。

「春よ来い。早く来い」。相馬御風作詞「春よ来い」の歌を  
引くまでもなく、今も昔も春は待たれ、その訪れは待ち遠し  
いものであった。

雪の降りけるを詠みける

清原深養父

冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやある

らむ

(『古今集』冬歌三三〇)

雪の降る冬の歌でありながら、降る雪を散る花に見立て、  
雲の彼方に春を幻想したのは、ひとえに冬の内に春を呼び込  
もうとしたものであろう。冬の雪を、あえて「花」と言い、  
「春」と続けたのは、そう言葉にすることでその実現を確信  
しようとした、すなわち言ほぎであった。

冬の内の春。春の訪れは、それほどに待望されるものであ  
った。対して「年の内」の春。こちらは年の明けるのを待た  
ずに、春のほうから来てくれた。これが喜ばしくないはずが  
ない。その喜びを、嬉しい悲鳴のかたちでとまどってみせた  
のが、「去年とや言はむ今年とや言はむ」になつたのではな  
いか。それもまた、一種の言ほぎである<sup>1)</sup>。

このように見るとき、この歌は『古今集』巻頭の歌として  
もふさわしいものとなる。

すなわち、古代、季節の順調な運行は、時を支配する帝王  
の徳と考えられた。それを考えるならば、一年の始まりを告  
げる春の順調な訪れは、何よりその徳を実証するものであつ  
たはずである。延暦十四(七九五)年正月十六日、平安の新

都への遷都にあたって「新京楽、平安楽土、万年春」と唱えられたことは（『類聚国史』）、春の訪れとその永続、そして帝徳の隆盛を言ほいで、新京の完成を祝うものにほかならなかった。

『古今集』編纂前夜の漢詩人島田忠臣も、年明けと立春とが一致した新年（貞観七（八六五）年）を、「七年歳旦立春」詩に詠んで、「四序調均第七年 三朝自与<sup>二</sup>立春<sup>一</sup>旋」（『田氏家集』）と讃えた。「三朝」とは、一年と一月と一日の三つの朝が揃う元旦のこと、この年はさらにそれに「立春」が重なった。まさにそれは、「四序」すなわち四季の順序が、「調均」すなわち調和して順調であると慶ぶべきことであつた。

「年の内に春は来にけり」は、その一段上を行く。「年の明けるも待ちきれずに、春のほうから勇んで駆けつけてくれた。何とめでたいことではないか。それほど今の世はよい世の中なのだ」ということになるだろう。この歌はほかならぬ勅撰和歌集の巻頭に位置付けられるとき、そういう治まる御代を言ほぎ、結果として帝徳を讃えた歌となるであろう。

## 二

子規の立言に疑問を呈した川口久雄「『古今和歌集』と漢文学―「年のうちに春はきにけり」という歌について―」（『西域の虎―平安朝比較文学論集―』）も、「年内立春」のテーマを文学史に辿っている。

年内立春を意識した作品はまず家持などが古いところらしい。（中略）

次いで道真は新撰万葉などではそういう歌をとったりしてはいないが、自ら漢詩に年内立春をよんでいる。仁和四年（八八八）十二月二十六日、任地讃岐で立春を迎えた時の七律である。（中略）

このほか延喜元年（九〇一）十二月十九日、太宰府においてもよんでいる。

### 元年立春

天は長く寒くして万物の凋<sup>しぼ</sup>みにたるを<sup>あはれ</sup>慰みて

晩冬に催<sup>うな</sup>がし立つ 早春の朝

浅きと深きと何れの水か氷なほ結べる

高きと卑ひくきと山として雪の消えざることなし

(下略)

などと詠じている。これは白氏文集の、たとえば、

府西池

柳氣力なくして條なだ先づ動き

池に波の紋ありて氷こほり尽ことごとく開く

今日知らず 誰か計会して

春の風春の水一時に來らむこと

などと通ずるものであり、また元稹と白居易が贈答した

ところの『元白唱和集』にみえる、

氷田地に消えて蘆あし錐短く

春は枝條に入つて柳眼た低る

などの元稹の作にも通ずる詩情である。要するに冬の氷のなから、春がうごき出してくることに興味を感じるのであり、氷は旧年の象徴であり、花や柳は新春の象徴であり、元白は年内立春ということはどうたわなないまでも、その詩情をうたったものがあって、元白を愛誦した道真あたりが、この詩情を年内立春というものに結びつけたとみられる。

このあとをうけ、道真と同じく大内記を歴た貫之が、元

白を愛誦し、道真の詩をも消化していたことはうたがいがなく、したがって年内立春の意識はかなり確立されていたにちがいない。(下略)

「要するに冬の氷のなから、春がうごき出してくることに興味を感じる」「詩情」と言うが、この観点で菅原道真「元年立春」の詩を見ると、その「春がうごき出してくる」のは、「天」の「愍み」によると考えられた、ということになるであろう。すなわち、天は寒い冬が長く続いて万物に元気の無いことに心を痛め、年明けを待たずに春を立たしめた、それは天の配剤による、ということである。以下、詩は「年内立春」の春暖の情景を讃えるが、翻つてその筆は太宰府流謫の我が身の上に及び、「根拔樹こ断た」骨傷魚豈な浪情な揺ゆと、独りその恩恵に浴せぬことを嘆く。天の感じて「年内立春」となった、せつかくの好時節に恵まれながら、我が身は不遇を託つばかりである。そこで彼は、想いを遠く都へと馳せる。「偏憑三延喜開二元曆一」東北廻レ頭拜二斗杓一。彼は、その年、年号を新たに「延喜」と改元して治政に臨む、醍醐天皇の仁慈を期待して、都の方、東北の夜空を仰いだのであった。「浅き水も深き水も水がまだ結んで

るのは何処にもなく、高き山も低き山も雪が消えない山はないと延喜改元の御代となつて萬物は皆春の喜びにあつてゐることを作つて、暗に菅公自身の境遇を反映されてゐる」(柿村重松『藤原明詠集要解』)。

そこで改めて考えられるのは、冒頭で「年内立春」を天の配剤としたのは、畢竟それは、天皇の仁慈に天が感じた結果だと言わんとするものではなかつたか、ということである。天皇の仁政に天が感応し、あたかも改元したその年のうちに春を立たしめた。年明けを待たずに春が来たのは、帝徳に天が感じた結果である。この詩の背後には「年内立春」に対する、そういう捉え方があつたことを窺うことができる。

とすれば、『古今集』巻頭歌、「年の内に春は来にけり」も、年の明けるのも待ちきれずに、勇んで春が馳せ参じて来た、という慶びを詠じて、結果的に、帝徳を讃えた歌となつていると考えられるであろう。季節の巡行というのは、それ自体慶ぶべきものだが、それはもとより帝徳の現れでもある。それは当然のこととして、このたびは、その上を行つて、年の明けるのに先んじて、慶ぶべき好時節が勇んで到来して来た。天皇の仁政を慕つてのことであろう。それほど、今時天皇の仁慈は広く深いということを、この歌は結果として歌うもの

ではなかつたか。

そう考えるとき、この歌は、本朝最初の勅撰和歌集の開巻を高らかに告げる、巻頭慶祝の歌として、まさしくふさわしいものになる。

されば、『古今和歌集両度聞書』に言う。

さて此集はよく物の法度を直すにするに、大かたさしむきたる立春をば入らずして、年の内の立春入る事は如何。此集は、これ君子の徳、万姓の楽しみあらん事を元とせり。春といふは、四時に取りては祝ひの時、万物の始めなり。春の来たる事は恵みの発する義なり。しかれば仁徳も末遠く起こり、民の心も樂しむべきを、先づ尺する義なり。

『古今和歌集』には、以下、嘉い季節の訪れを待望し、謳歌し、その去り行くのを愛惜する歌が並ぶ。それらもまた治まる御代を前提として見ることができるとであろう。

(一)「雪の内に春は来にけり」と、よく似た表現で歌い起こす

二条の後の春の初めの御歌(春歌上 四)、

雪の内に春は来にけり鶯のこほれる涙今やとくらむも同様に考えられるであろう。暦の上では春になったは

## (2)

ずなのに、現実には雪景色、春の気配とてない。そこで春を求めて、想像を遠く山間の谷間へと馳せたのである。春告鳥である鶯も冬の間は谷にいろと馳せたのが、中国『詩経』以来の理解。また「こほれる涙今やとくらむ」も、立春の日の「東風解凍」(『礼記』)に基づく。すなわち、今ここには春の気配もないけれども、遠くの谷間では春風が立って、鶯の涙の水を解かしているに違いない、鶯が来て春を告げるのも、そう遠くないであろう、言葉の上に春の情景を描き出すことで、春の訪れを言ほいだのである。なお、この歌については、渡辺真優佳「鶯のこほれる涙いまやとくらむ」「古今集」二二条后の春の初め御歌」考」(『成城国文学』第十九号)参照。

何より『古今和歌集』は、天皇の仁慈の下に編纂されたことを標榜する歌集なのであった。すなわち、「あまねき御うつくしみの波、八洲の外まで流れ、広き御恵みの陰、筑波山の麓よりも茂くおはしまして」(仮名序)、「仁流秋津洲之外、恵茂筑波山之陰」(真名序)。

(うえの・えいじ) 成城大学教授